



復活節第 5 主日 (ヨハネ 14:1-12)

聖母からイエスへ、イエスから御父へ

浜串教会は本日、岬にある希望の聖母像まえからロザリオを唱えながら聖母行列をおこない、聖母月の総仕上げとして聖母をたたえました。わたしたちが今日復活節第 5 主日の典礼を聖母行列から始めたことは意義深いと思います。今週の福音の学びとして、「聖母からイエスへ、イエスから御父へ」というテーマでまとめたいと思います。

ロザリオの祈りは、皆さんよくご存じのように、「喜びの神秘」「苦しみの神秘」「栄えの神秘」「光の神秘」という各神秘に 5 つの黙想があり、合計 20 の黙想をするようになっています。黙想の進め方は、黙想への招きを唱え、続いて主の祈りを 1 回、アヴェ・マリアの祈りを 10 回、結びに栄唱を唱えます。

今日は特に、ロザリオの祈りを唱えながら行列を行いました。行列は当てもなく移動しているではありません。希望の聖母像から、浜串教会聖堂に向かう行列でした。それは、言い換えれば、イエス・キリストの生涯を黙想しながら、聖母マリアからイエスへと向かう歩みだったわけです。

聖母マリアをたたえるロザリオの祈りは、黙想に示された招きを考えれば考えるほど、わたしたちの心がイエスに向かうように導かれていきます。なぜ、聖母マリアをたたえる祈りなのに、イエスに導かれていく内容になっているのでしょうか。それは、マリアの生涯がイエスに導かれていく生涯だったからです。

マリアはその生涯を通して、イエスに起こるすべての出来事を心にとめて生きられました。多くの場合、マリアにとって理解するのが難しい出来事の連続でした。それでも、すべてのことを心にとめて、思い巡らしたのです。

わたしたちはロザリオの祈りを通して、聖母マリアに心を合わせるように努めます。するとその行いはそのまま、マリアからイエスに心を合わせることに向かうのです。

ですからわたしたちはロザリオの祈りを唱えるとき、マリアからイエスに心が向かっていきます。マリアの中に、イエスがおられると言ってもよいでしょう。わたしたちがマリアに心を合わせるなら、それがそのまま、イエスに心を合わせることになるのです。

聖母行列が、わたしたちに今日の復活節第 5 主日のイエスのみことばをよりよく黙想する助けを与えてくれます。ロザリオを唱えながらの行列で、マリアに心を合わせるとき、マリアの中にイエスがおられ、わたしたちもマリアを通してイエスに心が向かっていきました。

イエスは「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい」(14・11)と言われました。わたしたちがイエスに心を合わせようと努めるとき、「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」とのみことばにたどり着けるのだと思います。

実際に、マリアの生涯がイエスのみことばの意味を説明しています。マリアはイエスによって、父なる神の人類を救う計画が一つ一つ実現していくのを見ました。そこでイエスが「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられる」ことの見えるしるしだと悟ったのです。

ところで、三年間イエスと共にいる弟子たちに、そこまでの理解はなかったようです。トマスはこう言います。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」(ヨハネ 14・5) フィリポはこう言います。「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」(14・8)。

イエスの答えはこうです。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。」

(14・9) 3年間イエスと寝食を共にするというのは、イエスにとっては相当に長い期間であり、イエスのことを分かってもらえる十分な時間だったのでしょうか。

しかし、弟子たちが必ずしもイエスの期待に応えられているとは限りません。三年間寝食を共にしていても、何を見て、何を考えていたか、またイエスが話されたことを一つも聞きもらさずに聞いたかと問われると、だれ一人完全に応えることのできた弟子はいないでしょう。

「こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。」弟子たちはイエスの期待するところまでたどり着いていませんが、この弟子たちにイエスはどのように接していかれたのでしょうか。情けない弟子たちだと、投げやりになったのでしょうか。

むしろイエスは、弟子たちが最後の最後にイエスの期待にたどりつけるように「業」を準備してくださいました。それはイエスの死と復活です。イエスが、人間の救いのためにご自分のいのちさえ投げ出してくださいましたことで、イエスの内に御父がおられ、イエスは御父の内におられることを弟子たちは信じることができました。

弟子たちの理解は、すべてを心に納めて、思いめぐらしたマリアのように深くはありませんでした。けれども弟子たちも、マリアを通してイエスにたどりつき、イエスを通して御父を見ることができました。

弟子たちの道のりは、そのままわたしたちの道のりです。わたしたちも、マリアのようにすべてを心に納めて、思い巡らす境地にはたどり着いていませんし、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません」としか言えない信仰者です。

それでも御父はわたしたちに、マリアを通してイエスにたどりつく道を与えてくださいました。またイエスを通して、御父に至る道を与えてくださいました。今日わたしたちは、聖母行列とミサ聖祭を通してその両方を体験しています。

マリアを通してイエスに至る道、イエスを通して御父に至る道を知るわたしたちは、この世にしか歩く価値を見いだせない人々に、救いに至る道があることを知らせましょう。わたしの歩く道を見てくださいと言えるような生き方ができるように、ミサの中で恵みを願いましょう。